

準 Newton 法の概要

連続微分可能な関数 $f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ の無制約最小化問題を考える．簡単のために，記号

$$f_k \equiv f(\mathbf{x}_k), \quad \nabla f_k \equiv \nabla f(\mathbf{x}_k), \quad \nabla^2 f_k \equiv \nabla^2 f(\mathbf{x}_k)$$

を用いる．

Newton 法では，Newton 方程式

$$\nabla^2 f_k \mathbf{d} = -\nabla f_k \quad (1)$$

の解として探索方向 \mathbf{d}_k を定義する．一方，準 Newton 法では，(1) の $\nabla^2 f_k$ を適当な正定値行列 B_k で近似する．つまり，準 Newton 法における探索方向 \mathbf{d}_k は，線形方程式

$$B_k \mathbf{d} = -\nabla f_k \quad (2)$$

の解として定められる．準 Newton 法の概要は，次の通りである．

アルゴリズム 1 (準 Newton 法のプロトタイプ).

Step 0: 初期点 \mathbf{x}_0 および $B_0 \succ O$ を選ぶ．十分小さい $\epsilon > 0$ を定め， $k = 0$ とおく．

Step 1: 停止条件 $\|\nabla f_k\| < \epsilon$ が満たされていれば， \mathbf{x}_k を解として終了．

Step 2: 線形方程式 (2) を解いて探索方向 \mathbf{d}_k を求める．

Step 3: 直線探索により α_k を定める (Wolfe の条件などを用いる) ．

Step 4: $\mathbf{x}_{k+1} = \mathbf{x}_k + \alpha_k \mathbf{d}_k$ と更新する ．

Step 5: $B_{k+1} \succ O$ を生成する (後述) ． $k \leftarrow k + 1$ において Step 1 へ ．

アルゴリズム 1 の Step 5 では， B_k ， \mathbf{x}_k ， \mathbf{x}_{k+1} ， ∇f_k ， ∇f_{k+1} を用いて $\nabla^2 f_{k+1}$ の近似行列 B_{k+1} を生成する．簡単のために

$$\mathbf{s}_k \equiv \mathbf{x}_{k+1} - \mathbf{x}_k = \alpha_k \mathbf{d}_k, \quad \mathbf{y}_k \equiv \nabla f_{k+1} - \nabla f_k, \quad \rho_k \equiv \frac{1}{\mathbf{y}_k^T \mathbf{s}_k}$$

とおく． B_{k+1} を生成する方法として，次の二つの公式がよく知られている：

1. BFGS 公式

$$B_{k+1} = B_k - \frac{B_k \mathbf{s}_k \mathbf{s}_k^T B_k}{\mathbf{s}_k^T B_k \mathbf{s}_k} + \rho_k \mathbf{y}_k \mathbf{y}_k^T \quad (3)$$

2. DFP 公式

$$B_{k+1} = (I - \rho_k \mathbf{y}_k \mathbf{s}_k^T) B_k (I - \rho_k \mathbf{s}_k \mathbf{y}_k^T) + \rho_k \mathbf{y}_k \mathbf{y}_k^T \quad (4)$$

(3) や (4) で定められる B_{k+1} は、次の性質を満たすことが確認できる。

(a) B_{k+1} はセカント条件 $B_{k+1}s_k = y_k$ を満たす。

(b) B_k が対称行列ならば B_{k+1} も対称行列である。

(c) $B_k \succ O$ かつ $s_k^T y_k > 0$ ならば $B_{k+1} \succ O$ である。

このうち、性質 (c) の仮定に注目する。実は、Step 3 において α_k を Wolfe の条件を満たすように選ぶと、条件 $s_k^T y_k > 0$ は自動的に満たされる。というのも、まず、 s_k の定義および Wolfe の条件 $\nabla f(x_k + \alpha_k d_k)^T d_k \geq c_2 \nabla f_k^T d_k$ より $\nabla f_{k+1}^T s_k \geq c_2 \nabla f_k^T s_k$ が得られる。このことと y_k の定義より

$$y_k^T s_k = (\nabla f_{k+1} - \nabla f_k)^T s_k \geq (c_2 - 1) \nabla f_k^T s_k = (c_2 - 1) \alpha_k \nabla f_k^T d_k \quad (5)$$

が得られる。 $B_k \succ O$ ならば、 d_k は降下方向である（つまり、 $\nabla f_k^T d_k < 0$ を満たす）。このことと $c_2 < 1$ より、(5) の最右辺は正である。従って、 $s_k^T y_k > 0$ が成り立つことが分かる。

B_k の更新公式 (3) や (4) に対して Sherman–Morrison–Woodbury の公式¹を適用すると、 B_{k+1} の逆行列 $H_{k+1} \equiv B_{k+1}^{-1}$ を陽に求めることができる。このようにして得られる H_k の更新公式を、H 公式と呼ぶ。これに対して、(3) および (4) は B 公式と呼ばれることもある。

1. BFGS 公式の H 公式

$$H_{k+1} = (I - \rho_k s_k y_k^T) H_k (I - \rho_k y_k s_k^T) + \rho_k s_k s_k^T \quad (6)$$

2. DFP 公式の H 公式

$$H_{k+1} = H_k - \frac{H_k y_k y_k^T H_k}{y_k^T H_k y_k} + \rho_k s_k s_k^T \quad (7)$$

アルゴリズム 2 (BFGS 公式の H 公式を用いた準 Newton 法)。

Step 0: 初期点 x_0 および $H_0 \succ O$ を選ぶ。十分小さい $\epsilon > 0$ を定め、 $k = 0$ とおく。

Step 1: 停止条件 $\|\nabla f_k\| < \epsilon$ が満たされていれば、 x_k を解として終了。

Step 2: 探索方向を $d_k = -H_k \nabla f_k$ により求める。

Step 3: 直線探索により Wolfe の条件を満たすように α_k を定める。

Step 4: $x_{k+1} = x_k + \alpha_k d_k$ と更新する。また、 $s_k = x_{k+1} - x_k$, $y_k = \nabla f_{k+1} - \nabla f_k$, $\rho_k = 1/y_k^T s_k$ とおく。

Step 5: (6) により H_{k+1} を計算する。 $k \leftarrow k + 1$ において Step 1 へ。

アルゴリズム 2 では、Step 2 において探索方向 d_k は行列にベクトルを乗じることで求められる。従って、アルゴリズム 2 を実行するには、1 回の反復あたり $O(n^2)$ の計算で済む。つまり、探索方向を求めるために (2) のような線形方程式を解く必要がないことが、H 公式の利点である。

(November 14, 2012, 寒野)

¹正則な行列 $A \in \mathbb{R}^{n \times n}$ およびベクトル $a, b \in \mathbb{R}^n$ に対して、行列 $\hat{A} = A + ab^T$ を考える。このとき、 \hat{A} が正則ならば $\hat{A}^{-1} = A^{-1} - \frac{(A^{-1}a)(b^T A^{-1})}{1 + b^T A^{-1}a}$ が成り立つ。